



ポルヴォー

素材研究 (海外)



宿泊滞在で堪能してみたい奥深い魅力 歴史と文化に育まれた古都・ポルヴォー

ポルヴォーのアイコンとなっている川岸の赤く塗られた倉庫群



15世紀初頭に建てられた旧市街の高台に立つ大聖堂



旧市街には散策を楽しめる小道が随所に



その歴史は13世紀まで遡るといわれるポルヴォーの景観



旧鉄道駅の古い石造りの建物(上)とギフトやインテリア用品、手工芸品なども展示・販売されている隣接の倉庫

ヘルシンキからの日帰り圏に位置する町として根強い人気を維持してきたポルヴォー。JATAのTeam EUROPE観光促進協議会が今年6月に選定した「美しい村30選」に入ったことで、改めて、その存在が注目を集めています。

フィンランドで2番目に長い歴史

フィンランドのゲートウェイでもある首都ヘルシンキから北東へ約50キロ、電車なら1時間ほどというポルヴォーは、日本からのツアーでは出発・到着の前後などで気軽に立ち寄ることができるデスティネーションとしても、人気を誇っています。

そのポルヴォーの歴史は13世紀まで遡り、14世紀には教会区として史料に登場していることから、フィンランドではトゥルクに続いて2番目に長いと言われる800年の歴史を持つ町です。

中世の面影を色濃く漂わせる石畳の旧市街や川岸に並ぶ赤く塗られた木造の倉庫群は、長い歴史と街並みの美しさを象徴するもので、ムーミンの作者であるトーベヤンソンをはじめ、多くの詩人や芸術家からも愛されてきました。

フィンランドを代表するアーティストたちにインスピレーションを与えてきたポル

ヴォーは、フィンランド文化を育んできた「心の故郷」とさえ言われているほどです。

町の随所に散策を楽しめるコース

ポルヴォーのアイコンとなっているのが川岸の倉庫群。赤く塗られているのは、18世紀に統治していたスウェーデン王のグスタフ3世に敬意を表したもので、貿易の要衝としても役割を果たしてきた町の歴史を物語っています。

中世の面影を残すパステルカラーの木造家屋が並ぶ旧市街と19世紀を代表する建築家であるカール・ルドヴィツヒ・エンゲルが1830年代に設計したエンパイア様式の住宅が並ぶ地区は、人気の高い散策コースです。フィンランド国歌となった「わが祖国」を詠んだ国民的詩人であるヨハン・ルドヴィグ・ルーネベリの自宅も、エンパイアスタイルの好例とされています。

旧市街の高台に立つ大聖堂は、15世紀初頭に建てられたもので、ロシア統治時代の19世紀初めにはポルヴォー議会の開会式も行われたという歴史的にも重要な建造物です。2006年には不運にも火災に見舞われたものの、2008年には復旧再開されました。

フィンランド政府観光局の能登重好日本代表は、「ドイツアールだけにとどまらず、貴重な歴史の舞台でもあるポルヴォーに宿泊滞在して、その奥深い魅力を堪能していただきたい」と呼びかけています。